

第111回 岡山外科会

と き：平成2年2月3日（土）13時より

と ころ：岡山大学医学部図書館3階

会 長：寺 本 滋

（平成2年4月2日受稿）

1. 特発性食道破裂の2例

岡山大学第二外科 大谷 順 多胡 護 稲岡 祥治
 中山 裕 宣 吉 實 憲 小松原 正吉
 寺本 滋

特発性食道破裂は比較的希な疾患であるが、一旦発症すると急激に重篤化することが多く、早期の診断、治療が要求される。最近我々は本症の2例を経験し、1例は重篤な膿胸により失

なったが、1例は救命し得た。自験例を反省するとともに本症の発生機序、診断、治療について若干の文献的考察を加えて報告する。

2. 甲状腺癌を合併した頸部食道癌の2例

岡山大学第一外科 村松 友義 上川 康明 森木 康之
 合地 明 淵本 定儀 阪上 賢一
 折田 薫 三

食道と甲状腺の重複癌2例を経験した。2例とも中年女性、同時性重複癌であり、食道癌はCe中心でstage IVであった。食道と甲状腺の重複癌は稀であり、自験例を含めた臨床報告10例を検討すると、同時性7例、異時性3例、男

女比3：7、平均年齢61.7歳であった。またstage IVの進行癌が多く予後が悪かった。異時性3例は全例第1癌が甲状腺癌で放射線治療を受け、約6年後に食道癌を発症しており、放射線誘発癌の可能性が示唆された。

3. 跨大弯胃腸吻合術6例の経験

岡山赤十字病院外科 大守 規敬 佐藤 泰雄 大塚 康吉
 小野 監作 川上 俊爾 古谷 四郎
 辻 尚志 青木 淳 宇高 徹総

切除不能の幽門部胃癌などで見られる通過障害に対し bypass 手術として、胃空腸吻合術が行われるが、効果不十分な場合にしばしば遭遇する。我々は、最近、石野の提唱した跨大弯胃空腸吻合術を6例の症例に行い良好な結果を得

たので報告する。

本術式の要旨は、大弯に跨って前後壁に及ぶ吻合孔を設置することであり、手技も簡単であり、効果も満足すべきものであった。

4. 腸重積を合併した空腸脂肪腫の1例

倉敷中央病院外科 西澤 孝 高三秀成

症例は42歳男性。食べると嘔吐する状態をくり返した。小腸透視で空腸に閉塞部位があり、同部に腫瘤様陰影を認めた。開腹すると空腸の腸重積であった。陥入腸管には壁の内外に突出した腫瘍を認めたため切除した。病理組織診断

は脂肪腫であった。小腸腫瘍は稀な疾患であるが、その中で脂肪腫は平滑筋腫に次いで多く、腸重積の合併率は報告例で約55%と高率を示すという特徴がある。

5. 偽膜性大腸炎の検討

川崎医科大学附属川崎病院外科 吉田 一典 月山 雅之 木曾 光則
光野 正人 松井 俊行 小山 昱甫
川崎 祐徳 吉岡 一由

過去5年間に経験した偽膜性大腸炎の7症例を検討した。年齢は平均65.1歳で高齢者に、性別は5対2で男性に好発し、基礎疾患としては腎不全、悪性疾患、術後に多かった。投与抗生剤はセフェム系が4例で、投与より10日前後で

発熱、下痢にて発症した。診断は手術例1例は摘出標本で、6例は大腸内視鏡で偽膜を認め、7例全例 *C. difficile* 毒素を検出した。診断が遅れると重篤であるが早期診断、VCM 投与により予後は良好であった。

6. 肝膿瘍穿破による后腹膜膿瘍の1例

国立岡山病院外科 大西 敏行 野村 修一 佐々木 澄治

69歳、男性。ペーチェット病の治療目的でステロイド長期投与を受けていた。

微熱を呈し、内科入院後、肝膿瘍が発見され、さらに、后腹膜腔へ穿破したため、外科紹介さ

れ、ドレナージ及び手術にて治療した。比較的めずらしい症例を経験したので治療方法及経過を報告する。

7. 腹部腫瘤で発見された肝嚢胞腺癌の1例

岡山済生会総合病院外科 守本 芳典 三村 哲重 筒井 信正
木村 臣一 枝 広 徹 広瀬 周平
片岡 和男

患者は57歳女性で主訴は腹部腫瘤。超音波で多胞性の腫瘤エコー、CTで嚢胞状、血管造影で新生血管像、嚢胞穿刺液中腫瘍マーカー局在、

ERCPで壁不整像を示し、拡大左葉切除術施行し、病理でCystadenocarcinomaと診断された1例を報告する。

8. 脾組織を含む縦隔奇形腫様嚢胞の1例

津山中央病院外科 貞森 裕 長江 聡一 波多野 浩明
日下 泰徳 中島 明 黒瀬 通弘
徳田 直彦

前縦隔に発生し、未分化な脾及び肺組織とい

った内胚葉性成分を含む奇形腫様嚢胞を経験し

たので報告した。症例は15歳，女性。前胸部不快感を主訴に来院。胸部 X 線，CT 検査で，前縦隔に境界明瞭な嚢胞状の腫瘤を認めた。画像診断より嚢胞状胸腺腫と考え，腫瘤摘出術を施

行。腫瘤の大きさは，7.5×6.5×5cm，病理組織学的に未分化な腭及び肺組織といった内胚葉性成分は含むが，外・中胚葉成分はなく，奇形腫様嚢胞と診断された。

9. 後腹膜神経鞘腫の1例

川崎医科大学消化器外科 吉田和弘 岩本末治 木元正利
長野秀樹 清水祐英 牟礼勉
柏田順一郎 小牧隆夫 山本康久
佐野開三

今回我々は後腹膜神経鞘腫の1例を経験したので報告する。

症例は42歳男性で腹部超音波検査で腫瘤を発見された。

精査にて，腫瘤は後腹膜腔に位置する嚢胞状

の病変で，周囲臓器とは関係なく，部位及び性状から後腹膜神経鞘腫と診断し，開腹下で摘出術を行った。

組織学的診断は ancient schwannoma であった。

10. 巨大腹腔内腫瘍の1例

岡山大学第一外科 塩崎滋弘 松野剛 森崎太
大野聡 猶本良夫 井上文之
津下宏 岡林孝弘 合地明
柏野博正 日伝晶夫 浜崎啓介
上川康明 淵本定儀 阪上賢一
三村久 折田薫三

症例は58歳の男性。左横隔膜下および小骨盤腔の充実性腫瘍および左腹腔内の巨大な嚢胞性腫瘍を認められ，1990年1月，開腹術施行。前者は胃体部大弯より壁外性に発生した腫瘍および転移巣であり，後者は腎嚢胞であった。手術

は胃部分切除を含めた腫瘤摘出術および嚢胞開窓術を施行した。組織学的には eosin 好性の細胞質を有した紡錘形および多角形の細胞の増殖であり核の大小不同，mitosis を認め malignant liomyoblastoma と診断された。

11. 両上前腸骨裂離骨折の1例

岡山市立市民病院整形外科 高取和弘 渡辺唯志 林 充
吉村一穂

我々は，比較的稀と思われる両側の上前腸骨棘裂離骨折の1例を経験したので若干の考察を加え報告する。

症例：14歳 男性

体育の授業（50m走）で疾走中，左上前腸骨棘部から左鼠径部にかけて激痛を生じる。来院時，歩行困難，両上前腸骨棘部の限局性の圧痛，腫脹が認められた。X線像では両上前腸骨棘裂離骨折を認め，左側では骨片の前外方への転位

を認めた。左側は転位，骨片とも大きく，また強く復学を希望したため手術適応と考え，左側に観血的，右側に保存的療法を行った。1年3ヵ月後の現在，ADL，スポーツ活動上何ら支障はなく，X線上骨癒合も良好であった。

治療法は，原則として保存的療法であるが，骨片が大きく転位が著しい場合，裂離骨片により神経症状を呈している場合，早期離床を要する場合などは観血的療法の適応と考えられる。

12. 手術を行った肩峰骨折の2例

岡山済生会総合病院整形外科 和 氣 博 文 定 金 卓 爾 橋 詰 博 行
川 澗 靖 人 永 沢 大

最近、我々は手術が必要と考えた肩峰骨折の2例を経験した。

1例は直達外力による肩峰基部の骨折で、将来、偽関節や変形癒合となり、impingementを

来たすことを考慮して手術を施行した。

他の1例は介達外力による肩峰鎖骨関節を含む肩峰前方部の骨折で、不安定性があり、肩峰鎖骨関節脱臼に準じて手術を施行した。

13. 下肢痛を伴った腰椎椎体後縁損傷の症例の検討

岡山労災病院整形外科 渡 部 邦 久 島 田 公 雄 田 中 裕 三
小 浦 宏 鶴 上 浩 甲 康 成
相 谷 哲 朗

下肢痛の原因が腰椎椎体後縁損傷による、9症例につき検討し、臨床的特徴、診断、病態、治療、について考察した。

8例に外傷の既往を認め、損傷部位は、L4下縁、L5上縁、S1上縁が各々3例である。臨床

所見の特徴は、坐骨神経の緊張徴候が強く、症状の改善後もこの徴候が残ることである。治療は5例に手術（全例椎間板ヘルニア合併）4例に保存的治療を行なった。

14. 手術療法を行った環軸関節回旋位固定の1例

岡山大学整形外科 石 川 聡 小 西 均 中 原 進 之 介
藤 井 俊 宏 寺 井 祐 司

今回我々は、陳旧性環軸関節回旋位固定の1例を経験した。症例は12歳女兒で、食事中頸を回すという軽微な受傷機転で頸部痛を生じ斜頸位となる。近医にて頸の骨がずれているといわれ頸椎カラーを1ヵ月装着するも放置。受傷後

1年9ヵ月して当科受診して直達牽引するも整復が得られず後方固定を施行した。本症例では、陳旧性でFieldingの分類III型に属するため観血的方法を行ったが、本来早期に牽引による保存療法を行うべきである。

15. 徒手整復し得なかった股関節後方脱臼の1例

岡山大学整形外科 宮 本 宣 義 花 川 志 郎 寺 井 祐 司
田 辺 剛 造
半田病院 半 田 祐 彦

今回我々は、徒手整復し得なかった股関節後方脱臼の1症例を経験した。症例は、22歳男性、現病歴は、1989年11月14日、トラックの助手席に座っていて、追突し受傷。直ちに受診した。臨床症状、レ線より右股関節後方脱臼と診断し、

全麻下に徒手整復を試みたが、大腿骨頭は不動で徒手整復不能、直ちに観血的整復術を施行した。術中所見で整復障害因子は緊張した前方関節包、嵌入した後方関節包、内反した関節唇であった。

16. 半月損傷が誘因と考えられた膝関節持続性血腫の1例

岡山大学整形外科 行廣成史 井上一 守都義明
尾上仁一 田辺剛造

71歳の男性で、誘因なく持続性に関節内血腫を生じた1例を経験した。高血圧の既往があり、臨床検査ではLumpel-Leede陽性である以外は出血性素因はなかった。関節鏡で外側半月は高度の変性、断裂を認め、増殖した前角部周辺の

滑膜を含め全切除した。滑膜の組織像は非特異的慢性滑膜炎の所見であり色素性絨毛結節性滑膜炎の所見ではなかった。血管の脆弱性と高血圧を基盤に半月損傷による刺激が加わり血腫を形成したと考えられた。

17. 化膿性脊椎炎の初期診断についての検討

岡山赤十字病院整形外科 名越 充

最近経験した化膿性脊椎炎8症例の初期診断について検討した。

発症から1ヵ月以内に受診した3例は保存的に治療できたが、1ヵ月以上で受診した5例中4例には観血的治療が必要であった。

腰背部痛を主訴に来院した患者には、単純X線所見の有無にかかわらず、スクリーニングとして血液検査を行い、異常が認められれば、早期に他の補助検査を施行すべきであると考えた。

18. 椎骨脳底動脈系のstrokeに対し、頭蓋外血行再建術を行った3症例

岡山労災病院脳神経外科 坂井恭治 新見仁寿 諸岡 弘
難波真平
岡山大学脳神経外科 篠山英道
香川労災病院脳神経外科 藤本 俊一郎

われわれは、動脈硬化症の椎骨動脈(VA)起始部狭窄が原因と思われる椎骨脳底動脈系のstrokeに対し、VA transposition to CCA(総頸動脈)を3例に行った。術後、2例に一過性のHorner症候をみたのみであった。本術式は

椎骨動脈起始部が低くとも必ず胸郭外で行うことができ、手術侵襲が小さく、吻合も1ヵ所ので良い点で優れている。しかしCCAの一時血流遮断が必要なので、cross flowの乏しい例は、内シャントが必要であろう。

19. Microvascular Decompression の治療成績と合併症

岡山大学脳神経外科 富田 享

1981年より、当科では、片側顔面痙攣100例、三叉神経痛53例、舌咽神経痛5例の計158例についてmicrovascular decompressionを施行してきた。この間手術法の工夫や注意点の確認がなされ、飛躍的に治療成績が向上し、合併症が低下した。

1985年より1989年までの5年間で検討を加えると、片側顔面痙攣51例のうち48例94.1%、三叉神経痛32例のうち28例87.5%で有効であった。

合併症としては、一過性の聴力障害、耳閉感・耳鳴などがあるが、一過性であった。永続的障害としては、顔面痙攣の手術で3例に顔面神経麻痺を、7例に聴力障害を残した。三叉神経痛の手術においては聴力障害と外転神経麻痺を1例ずつ、顔面の知覚異常を9例に認めた。本法は診断が正確に行われれば、有効であり、安全な手術法といえる。

20. 遅発性外傷性多発脳内血腫の1 治験例 — 切迫脳ヘルニアの MRI 診断 —

水島中央病院脳神経外科 秋岡達郎 後藤正樹
岡山大学脳神経外科 伊藤隆彦

遅発性外傷性脳内血腫 (DTICH) の発生機序と治療法についてはいまだ一定した見解が得られていない。とりわけ減圧開頭術の適否に関しては、術後、新たな出血を生じた症例の報告も多く、禁忌であるとさえいわれている。私たち

は、多発性の DTICH による切迫脳ヘルニアを MRI で診断し、穿頭による限局性減圧法により救命しえた1例を報告し、冠状断 MRI の有用性と頭蓋内における Force Vector の意義を強調した。

21. 多発神経鞘腫の1例

岡山大学整形外科 水田 豊 伊藤士郎 山根孝志
川井 章 田辺剛造
岡山大学脳神経外科 衣笠和孜

大腿と頭蓋内に多発した神経鞘腫の1例を経験した。症例は23歳女で、左大腿腫張を主訴に当科受診。家族歴、入院時所見に Von Recklinghausen 病を疑わせるものなし、精査の結果、左大腿及び頭蓋内に多発した神経鞘腫と判明。

大腿部腫瘍摘出後、頭蓋内腫瘍は現在脳神経外科で経過観察中である。報告によれば、神経鞘腫の多発例は約10%を占める。末梢神経の神経鞘腫が判明した場合は、多発性も考慮して全身の検索が必要である。

22. CT により発見出来た末梢型早期肺癌の1 治験例

川崎医科大学胸部心臓血管外科 川井伸一郎 福田久也 藤原 巍
稲田 洋 正木久男 森田 一郎
勝村 達喜

肺癌の早期発見に対する集団検診の重要性が唱えられ、また気管支内視鏡や、胸部 CT が普及し、早期肺癌や胸部 X 線写真無所見肺癌の発

見例が増加してきている。今回当科にて、59歳の女性で胸部 X 線写真無所見で、CT により発見出来た末梢型早期肺癌の1 治験例を報告した。

23. 肺原発の Hemangiopericytoma の1 新生児例

岡山済生会総合病院外科 佐々木 潔 大原利憲 村岡 篤
寒竹 一郎 戸田 耕太郎 木村 秀幸
北村 元男 片岡 和男

肺原発の Hemangiopericytoma の新生児例を経験したので報告する。症例：生後10日の女児。発熱を主訴とし、肺炎の診断で入院後、胸部 X-p, CT にて左胸部に巨大腫瘤を認めた。縦隔腫瘍を疑い生後19日目に手術施行、左下葉

内に被膜に覆われた8.5×6.6×3.5cm大、120gの腫瘍があり、組織学的に Hemangiopericytoma と診断された。術後4ヵ月後の現在でも再発は認められていない。このような新生児例は、本邦では、未だ報告されていない。

24. 拡大胸腺摘除術・ステロイド大量療法が著効した重症筋無力症の1例

岡山大学第二外科 牧原重喜 青江基 岡部和倫
中田昌男 原享子 宮井芳明
清水信義 寺本滋

Osserman IV型高齢者重症筋無力症の1例を経験した。この病型の症例は一般に手術の効果が少ないとされているが、本症例に対して拡大胸腺摘除術とステロイド大量療法を行ない術後

早期に著効を得た。

ステロイドで免疫異常を改善し、手術で本症の抗原と抗体を十分除去するこの併用療法は本症に対して極めて有効な治療法であると考えられる。

25. 心室中隔穿孔を合併した急性心筋梗塞の1症例

川崎医科大学胸部心臓血管外科 忠岡好元 藤原巍 土光荘六
野上厚 山根尚慶 原太久茂
三宅隆 勝村達喜

非常にその自然予後の悪いとされる、急性心筋梗塞後の心室中隔穿孔に対し、その急性期に手術を施行し、救命しえたので報告した。

術前診断にはベッドサイドのスワンガンツカテーターによる心カテーター検査と心超音波検

査が有用である。

手術は内圧の高い左室側にパッチを置く Single Patch 法を行なった。

本症の治療は外科的治療が原則的であり、その治療時期を極める必要がある。

26. ITA フリーグラフトを用いた冠動脈バイパス術

岡山大学第二外科 泉本浩史 村上泰治 喜岡幸央
紀幸一 青景和英 中山頼和
因藤春秋 多胡護 妹尾嘉昌
寺本滋

狭心症に対する冠動脈バイパス術において両側内胸動脈をグラフトとして使用する方法は最近注目されている術式であるが、今回われわれは、両側内胸動脈グラフトのうち、右内胸動脈を遊離グラフトとして用いた4例について報告

する。右内胸動脈遊離グラフトは、(1)目的冠動脈への距離が長く in situ では到達しない場合、あるいは、(2)再手術が将来考えられ in situ 右内胸動脈グラフトが胸骨後面を交叉する場合に適応がある。

27. 破裂性胸腹部大動脈瘤 (Crawford I型) の1治験例

心臓病センター榊原病院心臓血管外科 村上貴志 畑隆登 難波宏文
曾根良幸 瀬尾和宏 今牧瑞穂
杭ノ瀬昌彦 谷口堯

胸腹部大動脈瘤の外科治療において、大動脈遮断中に何らかの補助循環手段を用いる施設が多い。我々は、破裂性胸腹部大動脈瘤の症例に対し、中枢側では、Sarns の送血管を下行大動脈に、末梢側には USCI の送血管を大腿動脈に

挿入後、シャントチューブで接続するという方法を用い、一時バイパス下に人工血管置換術を施行したが、この方法は、操作性の容易さ、安全性、出血量の減少という点で有効と考えられた。

28. 死体腎移植における右腎静脈延長術

岡山大学第一外科	三好和也	河村武徳	羽井佐実
	塩崎滋弘	藤原拓造	日下敏
	猶本良夫	淵本定儀	阪上賢一
	折田薫三		
国立岡山病院外科	田中信一郎		
幸町病院	内田晋	国米欣明	

右腎静脈は左腎静脈の約 1/3 の短茎であり、それ故に右腎の移植に際しては種々のトラブルに悩まされる。この欠点に対し、我々は下大静脈を形成する方法及びドナーの総腸骨静脈を間置する方法の 2 種の右腎静脈延長術を 9 例の死

体腎移植症例に実施した。その結果、血管吻合時には十分な視野が得られ、また術後も吻合部狭窄や静脈血栓を認めず良好な腎機能を示した。我々の右腎静脈延長術は右腎の移植成績を向上させる有効な方法と考えられた。

29. 腎動脈狭窄を合併した腹部大動脈瘤の手術経験

国立岡山病院心臓血管外科	岸淳彦	森田照正	藤田邦雄
	谷崎真行		

左腎動脈狭窄を伴う腹部大動脈瘤に対し腹膜外経路で血栓内膜摘除、Y グラフト置換術を施行した。上腸間膜動脈より両側総腸骨動脈に至

る良好な視野が得られ、円滑に手術操作が行えた。当例の如き症例に対して同法は有用であると考えられた。

30. FCR による末梢血管疾患の診断

岡山大学第二外科	中井幹三	杉山悟	細谷晃弘
	武部晃司	三井秀也	栗原英樹
	松前大	内田發三	寺本滋

血管疾患の FCR による DSA 検査について報告した。FCR の利点は DF と比べ、観察可能域が広く解像力が高い点である。一方処理時間が長く CRT ディスプレーでないために、処理操作の柔軟性に欠けるなどの欠点がある。経

静脈性 DSA は極めて侵襲が少なく施行でき、外来患者のスクリーニングと経過観察においても応用しうる。経動脈性 DSA は実質相の描出に優れている。

31. 妊娠に合併した出血性副腎嚢腫の 1 例

水島中央病院外科	竹内龍三	為季清和	森本接夫
児島市民病院外科	福田和馬		

出血性副腎嚢腫は極めて稀な疾患であり、その基盤に外傷・白血病・腫瘍・ショック・妊娠・梅毒などがあげられて、その症状は様々である。我々は、35歳女性で妊娠 5 ヶ月に、突然の持続

する右背部痛を主訴として入院し、超音波検査・CT-スキャン・MRI が術前の確定診断に非常に有用であった症例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告した。

32. 持続硬膜外ブロック無効例の検討

岡山大学麻酔科蘇生科 小原 祐子 辻 千昌 宮崎 峰生
小林 尚日出

当科入院中の患者で持続硬膜外ブロック施行中効果の疑わしい症例に造影を行った結果、カテーテル先端は筋層または神経叢にあった。

ブロック無効の原因は、カテーテルが硬膜外腔に入っている場合と逸脱している場合とに分

けられ、レベル不足、挿入距離、解剖等が関与していると考えられた。

そこで今回、カテーテルの確実な挿入のための注意点に関して文献的考察を加えてまとめた。